

疑問の金塊

海野十三

青空文庫

尾行者びこうしゃ

タバコ屋の前まで来ると、私は色硝子の輝く小窓から、チェリーを買った。

一本を口に銜くわえて、燐寸の火を近づけながら窓硝子の上に注目すると、向いの洋菓子店の明るい飾窓ウインドーがうつつていた。その飾窓の傍には、二人連の変な男が、肩と肩とを並べて身動きもせず、こつちをジーツと睨にらんでいるのが見えた。

「何処どこまでも、尾けてくる気だナ」

私はムラムラと、背後うしろを振りかえつて（莫迦ばか！）と叫びたくなるのを、やつと泳こらえた。

この尾行者のあるのに気がついたのは、横浜の銀座といわれるあの賑にぎやかな伊勢佐木町で夜食しよくを採り、フラリと外へ出た直後のことだった。それから橋を渡り、暗い公園を脱け、この山下町やましたちように入りこんで来ても、この執念しゆうねん深い尾行者たちは一向退散の模様がなないのである。

腕の夜光時計やこうどけいを見ると、問題の十一時にもう間もない。十五分前ではないか！

ぐずぐずしていると、折角せつかくの大事な用事に間に合わなくなってしまう。十一時になるまでに、こいつら二人を撒まけるだろうか。これが銀座なら、どんな抜け道だつて知っているが、横浜はまと来ると、子供時代住んでいた時とすっかり勝手が違っていた。大震災だいしんさいで建物の形が変り、妙なところに真暗な広々した空地がポツカリ明あいていたりなどして、全く勝手が違う。この形勢では尾行者たちに勝利が行つてしまふそうだ。残るは、これからすこし行つたところに、さらに暗い海岸通があるが、その辺の闇を利用して、なんとか脱走することである。

そんなことを考え考え前進してゆくうちに、向うに町角まちかどが見えた。私は大きな息を下腹一ぱいに吸いこむと、脱走は今であるとばかり、クルリと町角を曲つた。そして一目散に駆け出そうとする鼻先へ、不意に人が現あらわれた。

「オイ政、待つた！」

その声には聞き覚えおぼがあつた。これはいかんと引き返そうとすると、後からまた一人が追すがい絶はげつた。私はとうとう挟はさみ打ちになつてしまった。

(しまった！)

と思つたが、もう遅い。

「政！ 妙なところで逢うなア」

二人は予て顔馴染の警視庁強力犯係の刑事で、折井氏と山城氏とだった。いや、顔馴染というよりも、もつと蒼蠅い仲だったと云った方がいい。

「……」

私はチェリーを一本抜いて、口に銜えた。

「話がある。ちよつと顔を貸して呉れ」

「話？ 話ってなんです」

「イヤ、手間は取らさん」

刑事は猫なで声を出して云った。

「旦那方」私は真面目に云った。「銀座の金塊は、私がやったのじゃありませんぜ」

「ナニ……君だと云やしないよ」

刑事は撥つたそうに苦笑した。恐らくあの有名な「銀座の金塊事件」を知らない人はあるまいが、事件というのは今から十日ほど前、銀座第一の花村貴金属店の飾り窓から、大胆にもそこに陳列してあった九万円の金塊を奪って逃げたという金塊強奪事件である。犯人は前から計画していたものらしく、人気のない早朝を選び、飾窓に近づくと、イキナ

り小脇に抱かかえていたハトロン紙包しづつみの煉瓦れんがをふりあげ、飾窓目シヨウ・ウインドーがけて投げつけた。ガチャーンと大きな音がして、硝子には大孔おおあなが明いたが、すかさず手を入れて九万円の金塊を掴つかむと、飛鳥ひちようのように其の場から逃げ去った。それから十日目の今日まで犯人は遂に逮捕されない。なにしろ早朝のことだったから、目撃した市民も意外すくなに少い。手懸てがりを探したが、一向に有力なのが集らない。事件は全く迷宮めいきゆうに入ってしまった。警視庁は連日新聞記事の巨弾くらを喰って不機嫌の度を深めていった。その際に本庁ほんちようの強力犯の二刑事が、はるばる横浜はままで遠征して来たのは、誰が考えたって、ハハア金塊事件のためだなど気がつく。

「そう信用して下さるのなら、話はまた別の日に願ひましょう。今夜はこれで、だいぶ更ふけ過ぎていますからね」

私は軽く突っぱねた。時計をソツと見ると、既にもう十一時に間がない。私は気が気でない。

「いやに逃げるじゃないか」と執念深い刑事は反かえつて絡からみついてきた。「ところで一つ尋たずねるが、赤ブイ仙太を見懸みかけなかつたか」

「仙太がどうかしたんですか」

「余計なことを訊くな。貴様、仙太と何処で逢った。何時のことだ」

「旦那方。私はハマの仙太の番をするくらいなら、今時こんな場所を一人で歩いちゃいませぬぜ」と私はちよつと嘘をついた。

「ふざけるな。じゃあ訊くが、銀座無宿の坊ちゃんが河岸をかえて、なぜ横浜くんだりまで来ているのだ……」

坊ちゃん政——それは私にいつの間にか付けられた通り名だった。もちろんかねて顔馴染の二刑事が覚えているのも詮ないことだろう。だが云わでもその名前を呼びかけられりや、いくら此処は横浜だつて小さくなつていられるものかと、私はムツとした。

だがそのムツとするのが、私の悪い病気なのだ。現に銀座を出て、単身この横浜に流れて来たのも、所詮は大きいムツとするものを感じたせいではなかつたか。

(伝統の銀座を、横浜の奴等に荒されてたまるものかい)

若い私には無体にそいつが癪にさわつた。私は覗う相手から、覗うものを捲きあげてしまわなければ、死んでも銀座には帰らないと肚を決めているのだ。——で、その大事の前に、顔馴染の刑事なんかと喧嘩をしてはつまらないではないか。我慢をしろ！

「オイ何とか云えよ」

「黙つていちや、駄目じゃないか」

二人の刑事はジリジリと左右から肉迫してきた。相手の眼はらんらんと輝いた。私を大きな獲物と見込んで、どうしても物にしようという真剣さが見える。これは簡単に済まないぞ。おとなしく身を委して機会を待つか、それともサツと相手の足を払つて出るか、無気味な沈黙が三人の息を止めた。

と、その時だった。――

キ、キヤーツ。

と、魂消える異様な悲鳴が、突然に闇を破つて聞えた。どうやら向うの通らしい。途端に向うに見える時計台から、ボン、ボンと十一時を知らせる寝ぼけたような音が響いて来た。――ああ十一時。あの時刻だ。私はドーンと胸を衝かれたような激動を感じた。

金貨を握つた屍体

「うむ、事件だぞ」

「すぐ其処だ。行くか……」

二人の刑事は顔を衝突せんばかりに近づけて、お互いの腕を掴み合った。

「直ぐ行こう」

「だが此奴をどうする？」

「うむ。さあ、どうする？」

刑事は私の処置をどうしたものかと躊躇った。

「逃げませんよ、私ア」と言下に応えた。「一緒に行つたげましょう」

「お前も行くか。どうかそうして呉れ！」

刑事はホツと溜息をついた。

私はわざと先頭になつて駈けだした。刑事も横合から泳ぐように力走した。

真暗な、広い空地に出た。向うにポツンと二階建らしい倉庫のようなものが立っているが、灯もない真黒な建物だ。悲鳴はそのあたりから起つたように思われる。私は前面を注視しながら走つた。

沈黙の倉庫の前まで来ると、向うに火の消えた街灯の柱が何事か云いたげに立っている

た。その下に、長々と横たわっている黒い物があつた。

「旦那方。あすこに、一件らしいのが見えますぜ」

刑事は私の方に身体を擦りよせてきた。

「うん。伸びているようだナ。それッ」

三人はバラバラと、その方に近づいた。刑事の手から、懐中電灯の光がパツと流れだした。その光は直ちに、地上に伏している怪しい男の姿を捉えた。雨あがりの軟泥の路面に、青白い右腕がニユーツと伸びていて、一面に黒い泥がなすりついている——と思つたら、それは真赤な血痕だつた。水色のアルパカの上衣にも、唧筒で注ぎかけたような血の跡が……。全くむごたらしい光景だつた。

刑事は、倒れている若い男の横顔を照してみた。顔は血の気を失つて、只太い眉毛と、長い鼻とが残っていた。歯を剥き出した唇は、泥を噛んでいた。——と、刑事が叫んだ。「呀ッ。……これア、赤ブイの仙太じゃないか！」

赤ブイの仙太！ 仙太といえは刑事たちが、さつき私に訊いたところの横浜の不良で、カンカン寅の一味なのだ。

「そうだ、仙太だ。すっかり顔形が違っている感じだが、仙太に違いない」

「誰が殺つたんだろう？」

二人の刑事は、そこで顔を見合わせると、意味あり気に、後に立っている私の顔をジロリと睨んだ。

「……」

仙太だつてことは、お二人より先にこつちが知っていた。先刻あの悲鳴を聞いた瞬間に、

「仙太め、南無阿弥陀仏！」と口の中で誦えた程だ。

「死んでいる。……とうとう殺られたのだ。」

「全くひどい。後頭部から背中にかけて、弾丸を撃ちこんだナ」

「銃声は聞えなかつたが……」

「どこから撃つたのだろう」

刑事は蹴つたまま、遙か向うの辻を透かしてみた。そこは水底に沈んだ廃都のように、犬一匹走つていながつた。

逃げるなら今のうちだつた。しかし私は別に逃げようとはしなかつた。

刑事たちは、折角探し求めていた横浜ギャングの一人、赤ブイの仙太が、遂に無惨な死体となつて発見されたので、只もう残念でたまらないという風に見えた。二人は諦めか

ねたものか、なおも屍体をいじくりまわしていた。

「おやア、なんか掌ての中に握てっているぞ」

と、突然に、折井刑事が叫んだ。

「ナニ、握つっているつて？ よし、開けてみる」

山城刑事は懐中電灯をパツと差しつけた。屍体の右手は、蕾つぼみのように固く、指を折り曲げていた。折井刑事はウンウン云いながら、それを小指の方から、一本一本外していった。

「うん、取れた。……あツ、これは……」

「なんだ、金かねじゃないか！」

掌ての中からは一枚のピカピカ光る貨幣が出てきた。

「金だ。オヤこれは金貨だ！ それも外国の金貨だ」

金貨が出てきて、刑事達は俄にわかに緊張した。銀座の金塊盗難事件以来というものは、黄お金うしんを探して歩いた二人だ。その黄金製品である金貨が、屍体となった赤ブイ仙太の掌しょう中ちゆうから発見されたということは、極めて深い意味があるように思われたのだった。それにしても、それが外国金貨とは何ごとだ。

「旦那方」私は立った儘ままで云った。「金貨が落ちていますよ。ホラ、そこと、もう一つ、

こつちにも……」

「ナニ、金貨が落ちている？」

「本当だ……」

刑事たちは、屍体から眼を放すと、地面を嗅ぐようにして、路面を匍いまわった。同じような、三つの金貨が拾いあげられた。一つは屍体の伸ばした右手から一尺ほど前方に、もう一つは、消えている街灯の根っこに、それから最後の一つは、倉庫のような荒れ果てた建物の直ぐ傍に……。

「沢山の金貨だ。これは一体、どういうのだろうか」

「この金貨と、仙太殺害とはどんな関係があるのだろうか。それからあの金塊事件とは……」
刑事たちは、次々に出てくる疑問を、どこから解いたものかと、たいへん当惑している風だった。

「旦那方。金貨はまだまだ出てきますぜ」

と、私は仙太のズボンの右ポケットから、裸のままの貨幣を掴みだした。銅貨や銀貨の中に交って、更にピカピカ光る五枚の金貨が現れた。

「おい、余計なことをするナ」と折井刑事は一寸狼狽の色を見せて呶鳴ったが「もう無

いか、金貨は……」と、息せきこんだ。

「どれどれ」と代つて山城刑事が、ポケットとこのポケットに手をつきこんだが、その後は金貨が出てこなかった。全部で丁度十枚の金貨が出てきたわけだった。

「これアすくなくとも四五百円にはなる代物だ」と折井刑事は目を瞠つて、「仙太の持ち物としては、たしかに異状有りだネ、山城君」

「もつと持っていたんではないかね」と山城は眼をギロリと光らせた。「仙太のやつ、ここで強奪に遭つたのじゃないか。だから金貨が道に滾れている……」

「強奪に遭つたのなら、なぜ金貨が滾れ残っているのだ。それにわれわれが駆けつけたときにも、別に金貨を探しているような人影も見えなかった」

「そりや君、仙太を殺したからさ。……いいかね。仙太は数人のギャングに取り囲まれたのだ。前にいた奴が、仙太の握っている金貨を奪おうとした。取られまいと思つて格闘するうちに、手から金貨がバラバラと転がったのさ。手強いと見て、背後にいた仲間が、ピストルをぶつ放したというわけだ。前にいた奴は仙太を殺すつもりはなかった。仙太の仆れたのに駭いて、あとの金貨は放棄して、逸早く逃げだしたのだ。見つかつちや大變と
いうのでネ」

「これは可笑しい」と折井刑事は叫んだ。「第一、格闘だといつても、その証拠がないよ。入乱れた靴の跡も無しさ。第二に、前から強迫しているのに、背後から撃つたのでは、前にいる同じ仲間のやつに、ピストルが当りやしないかね。僕はそんなことじゃないと思うよ」

「じゃ、どう思う？」

「僕のはこうだ。仙太のやつ、ここまで来て金貨を数えていたのだ。ここは人通もない暗いところだけれど、向うの街の灯が微かに射しているので。ピカピカしている金貨なら数えられる。そこを遥か後方から尾けて来たやつが、ピストルをポンポンと放して……」

「ポンポンなんて聞えなかった。……尤も俺は消音ピストルだと思っっているが……」

「とにかく、遥か後方から放つたのだ。見給え、この弾痕を。弾丸は撃ちこんだ儘で、外へは抜けていない。背後近くで撃てば、こんな柔かい頸の辺なら、弾丸がつきぬけるだろう」

刑事たちは、その筋へ警報することもしないで、勝手な議論を闘わした。それは所轄警察署へ急報するまでに、事件の性質をハッキリ嘸みこんで、できるならば二人でもって手柄を立てたかったのである。それは刑事たちにとって、無理もない欲望だったし、それ

に二人が本庁を離れ、はるばるこの横浜はまくんだりへ入りこんでからこつち、二人で嘗なめあつた数々の辛酸しんさんが彼等を一層野心的にしていた。

私は先程から、二人の眼を避けて、屍体の横たわっている附近を、燐寸マッチの灯あかりを便たよりに探していた。そして漸ようやく「ああ、これだ」と思うものを見付けたのだつた。それは地面に明いた小さい穴だつた。これさえあれば、仙太殺害の謎は一部解けるといふものだ。

「ねえ、旦那方」と私は論争に夢中になつている刑事たちに呼びかけた。

荒れ倉庫あそうこの秘密

「ナ、なんだツ」と刑事は吃驚びっくりしたらしく、私を振り返つた。

「どうぞすい。一つこころで手柄を立ててみる気はありませんか」

「なんだとオ。……生意気な口を利くない」

「素敵な手柄が厭いやならししようが無いが……」

刑事二人は、ちよつと顔を見合わせていたが、やがてガラリと違つた調子で、

「なんだか知らないが、聞こうじゃないか」

「聞いてやろうと仰有るのですかい、はッはッはッ。……まあ、それはいいとして、旦那方。私は犯人の居処を知っていますよ」

「ナニ、犯人の居処？ 犯人は誰だッ」

「犯人は誰だか知らない。だが犯人の居処だけは知っていますですよ……ホラ、ここに真暗な崩れ懸つたような倉庫がありますネ。犯人はこの中に居るのですよ」

「何故だ。どうして此の中へ逃げこんだというのだ」

「喋っている、犯人が逃げだしますよ」

「しかしわれわれは、意味もないのに動けないよ」

「じゃ簡単に云いましょう。いま仙太のポケットから出た五枚の金貨ですがネ、あの金貨には泥がついていたのをご存知ですか」

「……」

「もう一つは、そこに錆びた五寸釘を立てて置きましたが、路面に垂直に、小さい孔が明いていますよ」

刑事たちは、目をパチクリさせて地面に踞しゃがむと、その錆びた釘を退けて、太い箸はしをつつこんだ程の縦たて穴あなを覗のぞきこんだ。

「これは？」

「ピストルの弾丸たまが入っているのですよ。今掘りだしてみましよう」

私は釘の先で、穴をどんどん掘った。すると案あんの定下じょうからニツケル色の弾丸たまがコロリと出て来た。

「ほほう、なるほど」刑事は駭おどきの声を放った。「これは何故だ」

「いいですか、上を向いちや、犯人が気付きますよ。下を向いて下さい。犯人は倉庫の二階の窓から仙太を撃ったのです」

「そりや変だ。仙太は背後うしろから撃たれている」

「いいえ、傷はあれでいいのです。仙太のポケットに入っていた金貨は泥がついていたでしょう。仙太の野郎は、あの金貨を皆、この路面から拾ったのです。だから泥がついてるんです。金貨は、同じ倉庫の二階から犯人が投げたのです。仙太がそれを拾おうと思つて、地面に匍はわんばかりに踞しゃがんだのです。いいですか。そこを犯人は待っていたのです。丁度われわれが今こうしている此の恰好かっこうのところを、上からトントンと撃ったのですよ」

「ナニ、この恰好のところを……」

上から撃たれたと聞いて、二人の刑事は、身の危険を感じてパツと左右に飛び退いた。

「そんなに騒いじや、犯人に気付かれますよ」と私は追^{おいすが}縋^{すが}って云った。

「さア早く、この建物の出口を固めるのです」

「よよし。おれは飛びこむ」

「だが、この屍体をどうする？」

刑事が躊^{ためら}つてるところへ、折よく、密^{みつこう}行の警官が通りかかった。

二人は物慣れた調子で、巡回の警官を呼ぶと、屍体の警戒やら、警察署への通報などを

頼んだ。警官はいく度も肯^{うなず}いていたが、刑事たちが、

「じや、願いますよ」

と肩を叩くと、佩^{はいけん}剣^{けん}を握^{にぎ}って忍^{しの}び足に元来た道へひつかえしていった。

「さあ、これでいい。……じやア、飛びこむのだ」

私たち三人は、抜き足さし足で、この建物の周囲をグルリと廻った。表の^{おおど}大戸^どは、埃^{ほこり}がこびりついていて、動く様子もない。裏手に小さい扉がついていて、敷^{しきい}居^いに^{なまなま}生々^{なまなま}しい泥靴の跡がついている。これを引張ったが、明かない。

「いいから、内側へ外はずして見ろ！」

経験がいかなる場合も、鮮あざやかに物を云った。戸の端はしがゴトリと内側へ外れた。それに力を得て、グングンお圧すと、苦もなく入口が開いた。——内は真暗だ。

懐中電灯の光が動いた。階下には、大きな古樽ふるたるがゴロゴロ転がっている。その向うには一斗と以上も入りそうなそれも大きな硝子ガラスびん壺つぼが並んでいる。ひどい蜘蛛くもの巣いたが到るところに掛っている。埃ちりっぽい上に、なんだか鼻をつくような酸いっぱい匂においがする。しかし犯人らしい人影は見えない。

「じゃあ、おれは入って見る」と折井刑事は低声こごえで云った。「山城君はここで番をして居給え」

「うん」

「私もお供しましょう」と申し出た。

「そうか。……だが危いぞ。おれはピストルを持っているけれど……」

「なーに、平気ですよ」

折井刑事と私とは、一步一步用心しながら建物の中に入った。樽たるの間を探してみたが、何も居ない。——刑事は頤あごをしゃくった。その方角に梯子はしご段だんが斜めに掛っていた。

(階段をのぼるのだな)

と私は思った。そのとき突然に、刑事の懐中電灯が消えた。

階段を一步一步、息を殺し、足音を忍んで上つていった。いまにも何処かの隅から、ピストルが轟然と鳴りひびきそうだった。

そのとき、折井刑事が私の腕をひっぱった。そして耳の傍に、やっと聞きとれる位の声で囁いた。

「二階に手が届くようになったから、一度懐中電灯をつけて見る。ピストルの弾丸が飛んでくるかも知れないが動いちやいけない。その後で懐中電灯を消すから、その隙に階上へとびあがるのだ。わかつたかネ」

私は低声で「判りました」と返事した。私を縛ろうとした刑事と、同じ味方となつて相扶け相助けられながら殺人鬼に迫つてゆくのだ。なんと世の中は面白いことよ。

折井刑事が、また一段上にのぼった。するとサツと一閃、懐中電灯が二階の天井を照した。灯は微かに慄えながら、天井を滑り下りると、壁を照らした。それから四圍の壁を、グルグルと廻つた。——しかし予期した銃声は一向鳴らない。途端にパツと灯が消えた。

(今だ！)

私は階上に駆け上った。その拍子に、いやというほど、グラグラするものに身体をぶつつけた。見当を違えて、樽にぶつかったものらしい。

十秒、十五秒……。

パツと懐中電灯が点つた。しかし何も音がしない。

(さては、自分の思いちがいだつたのか)

私はイライラしてきた。

「さあ、こんどは君がこいつを持つて」と刑事は私に懐中電灯を握らせ「先へ立つて、この部屋を廻つて呉れ。危険だからネ」そういつて彼はピストルで敵を撃つ真似をした。

私は電灯を静かに横へ動かした。部屋には階下同様、大きな硝子壘だの、樽だのが並んでいた。しかし階下には無かつた変な器械が一隅を占領していた。それは古い化学工業の原書げんしょにあるようなレトルトだの、耐酸性たいさんせいの甕かめだの、奇妙に曲げられた古い硝子管ガラスかんだの、大小高低だいしやうこうていを異にした架台かだいにとりつけられていたのだつた。

(さてはこの建物は、強酸工場きやうさんこうじやうと倉庫とを兼ねているんだな)

と私は気がついた。これは横浜はまへ明治年間に来た西洋人が、その頃日本に珍らしくて且かつ高価だつた硫酸りゆうさんや硝酸しょうさんなどを生産して儲けたことがあるが、それに刺戟しげきせられ

て、雨後の筍のように出来た強酸工場の名残なのだ。恐らく震災で一度潰れたのを、また復活させてみたが、思わしくないので、そのまま蜘蛛の棲家に委ねてしまったものだろう。それにしても……。

と、突然に、後方にガタンと樽の倒れる音がした。ハッと振りかえる間も遅く、飛び出した黒い影が飛鳥のように階段を駆け下りた。

「待てッ」

折井刑事は叫び声をあげるが早いか、怪影を追跡して、階段の下り口へ突進した。そして転がるように、駆け下りた。

激しい叫喚と物の壊れる音とがゴツチャになって、階下から響いてきた。出口にいた城山刑事に遮られて、怪漢は逃げ場を失い、そこで三人入乱れての争闘が始まっているのであろう。

しかし私は、懐中電灯を持ったまま、じつと階上の部屋に立ち尽くしていた。目の前にある何に使うとも知れない化学装置が、ひどく私の心を捉えたのだった。それは奇妙な装置でもあったが、私の興味を惹いたのは、それが奇妙なことよりも、むしろ生々しい感じがしたからだった。室内は荒れ果て、樽は真白な埃にまみれ、天井には大きい蜘蛛の巣が

懸つているといふ古めかしさの中に、その化学装置ばかりは、埃のホの字も附着していなかったからであつた。

私は事件の謎が、正しくこの場に隠されていることを感づいた。

「よしッ。この秘密を解かずに置くものかッ」私は腕ぐみをしたまま、石のように、何時までも立ち尽したのだった。

あやとりひき
怪しき取引

その次の日の夕方、私は同じ伊勢佐木町で、素晴らしい晩餐を執つていた。前日と違つているところは、連れが一人あることだった。壮平爺さんという頗る風采のあがらぬ老人が、私の客だった。

「ほんに政どん」と壮平爺さんは眼をシヨボシヨボさせて云つた。「あんたに巡りあわなければ、今頃わしや首をくくつていたかも知れん。あのカンカン寅が、人殺しの嫌疑でお

かみつかま
上に捕つたと聞いたときは、どうしてわしや、こうも運が悪いのかと、力もなにも一度に抜けてしまつてのう」

カンカン寅というのは例の仙太の親分に当る男で、昨夜あの海岸通の古建物で、折井山城の二刑事に捕つた怪漢のことだった。彼は始め階上に潜んでいたが、私たちをうまくやり過ぎしたところで階段を下りて逃げだしたが、出口に頑張っていた山城刑事に退路を絶たれ、遡るぐところを追いすがつた折井刑事に組みつかれ、そこで大乱闘の結果、とうとう縛についたというわけだった。二人の刑事は、案の定大手柄を立てたことになった。その悦びのあまり、一旦不審を掛けた私だったが、何事もなく離してくれたのだった。

しかし捕えたカンカン寅というギャングの顔役は、当局の訊問に対して、思うような自白をしなかつた。彼の手先である赤ブイの仙太殺しの一件を追求しても、首を横に振るばかりか、例の証拠をさしつけても一向恐れ入らなかつた。かねがね手強い悪党だとは考えていたが、あまりにもひどく否定しつづけるので、係官もすこし疑問を持つようになつたと、きよう折井刑事が不満そうに語つたことだった。

それに引きかえ、カンカン寅捕縛と共に、明かな失望を抱いたのは、この壮平爺さんだった。彼はあの古い建物の持ち主だった。彼は本牧で働いている彼の一人娘清子を除い

ては、この古い建物が彼の唯一の財産だった。ところで壮平爺さんは、目下大変な財政的ピンチに臨のぞんでいるのだった。それは先せん年、ついウカウカと高利貸こうりがしの証しょうもん文もんに連れんた帯いの判を押したところ、その借主がポツクリ死んでしまつて、そのために氣の毒にも明日が期限の一千円の調ちようたつ達たいに老おいの身を細らせているのだった。下手をすれば、娘の清子を棲すみかえさせて、更に莫大な借金を愛児の上に掛けさせるか、それとも首をくくつて死ぬより仕方がなかつたのだった。詮せんかた方かたなく、物は相談と思ひ、カンカン寅の許を訪ね、あのポロポロの建物を心ばかりの抵てい当とうということにして（あれでは二百円も貸すまいと云われた）、一千円の借金を申込んだ。

寅は何と思つたか、それを二つ返事で承知して、壮平爺さんを帰らせた。それは今から一月前のことだつた。しかしカンカン寅は一向に金の方は渡す様子がない。それで催促さいそくにゆくと、期限の前日までに渡してやろうという話だつた。ところが明日が約束の日という昨夜になつて、カンカン寅が突然警察へ監かん禁きんされてしまったので、爺さんは失しつ心しんせんばかりに駭おどろいた。顔色を変えてカンカン寅の留守宅へ行つて、いままでの事情を話すと共に、この際は非に融ゆう通ずうを頼むと歎たん願がんをした。しかし留守を預る人達は、老人の話を鼻であしらつて追いかえした。親分がこんなになつていて、そんなことが聞きかれると思う

か、いい年をしやがってという挨拶だつた。

心臓が停まるほど驚いた壮平爺さんは、泣く泣く我が家へ帰っていった。路々、この上は娘に事情を云つて新しい借金を負わせるか、さもなければ首をくくろうかといずれにしても悲壯な肚を決めかけていたところへ、私が背後から声をかけたのだつた。爺さんとは、私が少年時代からの知り合いの仲だつた。——と、まあこういう訳だつた。

「じゃあ爺さん。私がカンカン寅に代つて、あれを千円で譲りうけようと思うが、どうだね」

と、事情を訊いた私は、相談を持ちかけた。

「えッ。あんたが、代つて千円を」爺さんは目を瞠つて云つた。

「文句がなければ、金はいまでも渡そう」

「そうけえ。濟まないが、そうして貰うと……」

「ホラ、千円だア。調べてみな」

私は人氣のない室に安心して、千円の紙幣束を壮平に手渡した。その千円は、実を云えば銀座を出るとき、仲間から饞別に贈られた云わば友達の水や肉のように尊い金であつたけれど、老人はワナワナ慄える手に、それを受取つた。そして指先に唾をつけて、一枚

一枚紙幣を数えていった。

「確かに千両。わしや、お礼の言葉がない」

「お礼は云うにや及ばないよ。それよか爺さん、ちよつと云つて置くことがある」

「へーい」

「私が金を出したことは、誰にも云つちやならないよ。しかしそれがためにあの建物がまだ爺さんの手にあるのだと思つて、買いたいという奴が出て来たら、あの建物はいつでも返してやるから、直ぐ私のところへ相談に来なさい。いいかい爺さん」

「へーい、御親切に。だがあれを買いたいなんて物ずきは、これから先、出て来つこないよ、あんたにや気の毒だけれど……」

「はッはッはッ」

私は壮平爺さんを外に送りだした。老人のイソイソとした姿が、町角に隠れてしまうと、私は船会社と、東京から連れてきた身内の者と一緒に電話を掛けた。それから外へ飛び出した。それは私が横浜に来た仕事の片をつけるためだった。

どんな仕事？

ギヤング躍る^{おど}

その夜はたいへん遅くなって、宿に帰った。私はなんだか身体中がムズムズするほど嬉しくなつて、寢台^{しんだい}についたけれど、一向^{ねむ}睡れそうもなかった。とうとう給仕を起して、シャンパンを冷やして持つて来させると、独酌^{どくしゃく}でグイグイひっかけた。しかしその夜はなかなか酔いが廻らなかつた。

その代り、いろいろの人の顔が浮んで消え、消えた後からまた浮びあがつた。——銀座の花村貴金属店の飾窓^{シヨウ・ウインドー}をガチャーンと毀す覆面の怪漢が浮ぶ。九万円の金塊^{きんかい}を小脇^{こわき}に抱えて走つてゆくうちに、覆面がパリりと落ちて、その上から現れたのは赤ブイの仙太の赤づらだ。すると横合^{よこあい}から、蛇^{へび}のような眼を持つたカンカン寅がヒョククリ顔を出す。とたんに仙太の顔がキューツと苦悶^{くもん}に歪^{ゆが}む。カンカン寅の唇に、薄笑いが浮かんで、手に持ったピストルからスーツと白煙が匍^はい出してくる。二人の刑事の顔、壮平爺さんの嬉しそうな顔、そして幼な馴染^{おなじみ}の清子の無邪気^{むじゃき}な顔、——それが見る見る媚^{あでや}かな本牧の女の顔に

変る。

「明日になったら、清子に一度逢つてくれるかな。清子も逢いたいと云っているって、壮平爺さんが云つたが……。莫迦莫迦。手前はなんて唐変木なんだろう。自惚が強すぎるぜ。まだ仕事も一人前に出来ないのに……」

自嘲したり、自惚たりしているうちに、ようやく陶然と酔つてきた。——そして、いつの間にかグツスリ睡つたものらしい。

コツ、コツ、コツ。

慌ただしいノツクの音だ。それで目が醒めた。気がついてみると、空気窓からは明るい日の光がさしこんでいた。時計を見ると、午前九時。

「なんだア」

まだ早いのに……と、私は不満だった。

「朝っぱらから伺いやして……」

と、扉の向うでしきりに謝っているらしいのは、どうやら壮平爺さんの声だった。私は思わず、ギクンとした。

扉を開いてやると、転がるように壮平爺さんが入ってきた。顔色は真青だ。不眠か興

奮のせいか、まぶたは瞼が腫れあがっている。

「早いもので、ボーイさんも相手にせず、電話も通じて呉れないんで……」

と老人は恐縮きようしゆくした。

「なんだネ、こんな朝っぱらから」

私はチェリーをとって口に銜くわえた。

「イヤ政どん、今日は早朝から、わしも大騒ぎさ。アノ、カンカン寅の一家が、わしのところへ押し寄せてきやがった」

「ほうほう」私は紫の煙を、天井高く吹きあげた。美しい煙の輪がクルクル廻る。

「昨日はてんで相手にしなかつたあの海岸通の建物を買うというのさ」

「うん、うん」

「わしは腹が立って、手厳てきびしく跳ねつけてやったよ。あれはもう売っちゃまった。もう遅いよとナ。すると、それはいかん、是非こつちへ売れという。それは駄目なだと、尚なも突っぱねると、向うは躍やつき気さ。こつちへ買戻さねば親分に済まねえ。売らないというのなら手前は生かしちや置けねえと脅おどしやがる。それがどうも本気らしいので、政どんの昨夜ゆうべの話もあり、じゃあ一寸相談してくるといってその場は納めたが……」と壮平は顔を慄ふるわせた。

「——じゃあ、売っておやりよ」

「えッ」

「売ってやるが、すこし高いがいいかと云うんだ。五千円なら売るが、一文も引けないと啖呵を切るんだ」

「そいつはどうも」

「云うのが厭なら、私はあの建物を手離さないよ。……そいつは冗談だが、こいつは儲け話なんだ。相手は屹度買うよ。彼奴等はきつと今朝がた、留置場のカンカン寅と連絡をしたのだ。そのとき買つとかなければ手前たちと縁を切るぞぐらいなことを云つて脅したんだよ。カンカン寅から出た話なら、五千円にはきつと買う。やつてごらんよ」

壮平爺さんは、私が心を翻さないと見て、諦めて帰りかけた。

「ああ、ちよつと」と私は呼びとめ、「いいかい爺さん。五千円を掴んだら、直ぐ横浜を出発んだ。娘さんも連れて行くんだぜ」

「どうして?」

「もう此上横浜に居たつて、面白いことは降つて来やしないよ。お前たちは苦しくなる一方だ。いい加減に見切をつけて、横浜をオサラバにするんだ。ぐずぐずしていいりや、カ

ンカン寅の一味にひどい目に遭わされるぞ」

「……」

「そしてその五千円だが、それも爺さんにあげるよ。小さいときいろいろと可愛がつて貰ったお礼にネ」

「五千円を？」と壮平老人は目を丸くして「五千円よりもその言葉の方が嬉しいが、一体わし達はどこへ行けばいいのかネ。こうなると、わしはお前のところから遠く離れるのが心細くなるよ」

老人は悦よろこびのあとで、また両りょう眼がんをうるませた。

「満洲へゆくんだ。丁度ちやうど幸さいわい、今夜十一時に横浜はまを出る貨物船清見丸きよみまるというのがある。その船長は銀座生れで、親しい先輩さ。そいつに話して置くから、今夜のうちに港を離れるんだ」

「満洲かい。……それもよかろう」

「じゃ娘さんに話をして、直ぐに仕度にかかると。外ほかには誰にも話しちや駄目だぜ」

「そりや大丈夫だ」と老人は肯うなずいて「じゃ、万事お前さんの云うとおりにしよう。それでは順序として、まず五千円の商談をして来よう」

「ちよつと待った」と私は老人を呼び止めた。「あの建物の取引だが、今夜の十時にする
と行って呉れ」

「莫迦ばかに遅いじやないかね。いま直ぐじや拙ますいかい」

「ちよつと拙ますいのさ。というのは、あれを私が買ってから、中身なかみを少し搬はこび出してしまう
たのよ、そいつを元通りに返すとすると、どうしても午後十時になる」

「へえ、中身をネ」老人は訝いぶかしそうに眩くらいた。「中身なかみというと、あの酸の入っている：

…

「そうさ、酸を或る所へ持つていったのさ。買ったからにや、宝ものは私のものだからネ」
「そういえばカンカン寅の一味も、あの中身をソツクリつけてと云っていたよ。こいつは
変だぞ。…：オイ政どん、噂に聞くと、あのカンカン寅が銀座の金塊を盗みだしたとい
うが、お前は昨日ゆうべ、あの建物にカンカン寅が隠してあった九万円の金塊を探しだして、搬はこ
びだしたんだナ」

「金塊は無かったよ」と私は朗ほかに云った。「金塊どころか、金の伸棒のべぼうも入っていないか
ったことは、警官たちが一々検査して認めているよ」

「ほほう、そのとき警官が立ち会ったのかい」

「立ち会ったともさ。何しろその中身はいま警察へ行っているんだぜ」

「へへえ、中身が警察へネ。わしにや判らない。一体その酸をどうしようというので……」
 「いまに号外が出る。そのとき訳が判るよ」

横浜よ、さらば

その夜更けて、私は貨物船清見丸へ壮平親子を見送りにいった。甲板に堆高く積まれたロープの蔭から私たちは美しい港の灯を見つめていた。

「横浜を離れるとなると、やつぱり淋しいわ」

と清子が丸めたハンカチを鼻に当てた。

「清子、贅沢をいっっちゃ罰が当るよ」と壮平老人が云った。「政どんが来てくれなくちや、お互に今頃は屍骸になつて転がっていたかも知れない」

「でも……」

「ところが屍骸にならないばかりか、借金を返した上に、五千両の金まである。その上、言い分があつてたまるか」

「感謝しているわ。あたしたちはいろいろと儲けものをしていのに、政ちゃんは損ばかりしているのネ」

「そうでもないよ」と私は笑つた。

「どうだ政どん」と壮平老人はこのとき真顔になつて云つた。「この辺で、一件の話を聞かせてくれてもいいじゃないか。あの倉庫から搬び出した中身のこと、それからお前が横濱へ流れてきた訳など」

「じゃ土産咄に、言つて聞かせようか」

私はそこで、一件の要領をかいつまんで話をした。

——私は壮平老人から倉庫を一千円で買ったがあれには大きな自信があつたのだつた。あの夜、秘密に倉庫から警察へと搬んだ酸は、大きな硝子壺に入つて全部で二十五個だつた。それは見たところ、黄金の形は一向に無くて、澄明な液体に過ぎなかつたが、しかし本当は九万円の黄金が、この液体の中に溶けこんでいるのだつた。それは何故か？

王水おうすいという強酸きょうさんがあることを、人々は知っているであろう。それは硝酸しょうさんと塩え

酸んさんとを混ぜた混合酸であるが、この酸に黄金を漬つけると始めて黄金は形が崩くずれ、やがて、全く形を失つて液の中に溶とけ去る。それでこの強酸に王水という貴とうとい名前が附けられている。――

黄金を王水に溶かしたのは私ではない。それは今、殺人罪で警察に監禁かんきんせられているカンカン寅の仕事だ。彼奴あいつはそれを、あの海岸通の古い建物の中で仕遂しとげたのだ。九万円の金塊は、手下の赤ブイの仙太を使って、銀座の花村貴金属商から強奪ごうだつさせた。仙太が逃げ帰つてくると、煉瓦れんが大の其の金塊は巻き上げ、仙太の身柄は身内の外に隠した。しかし仙太がいずれその内に喋しゃべるのを恐れたカンカン寅は、残虐ざんぎやくにも仙太に報酬ほうしゅうをやるといつて呼び出した。

仙太は何も知らず、云いつけ通り海岸通の古建物の前へ来て口笛を吹いたのだろう。カンカン寅は、仙太と一室に逢うのは仙太のために危険だと巧いことを云い、あの建物の二階から、報酬の金貨を投げ与えたのだ。仙太が地上に散らばつた金貨を拾おうと跣かかんどころを、二階からカンカン寅が消音しょうおんピストルを乱射らんしゃして殺してしまつたのだつた。仙太の行動に不審を持つていた私は、あの会合の時間も場所も知つていたのだつた。とにかく気の毒な仙太だ。

笑止千萬なのは、カンカン寅だ。あの古い建物を壮平爺さんの手から買いつたと悦んでいるだろうが、九万円の液体黄金の無くなったことは夢にも知らないのだ。今夜私が搬び入れて置いた中身の酸は、分量こそ同じ二十五壘だが、東京から買った純粋の酸でしかない。カンカン寅の奴、後でそれを分析してみても、一刃の黄金も出てこないときには、どんな顔をする事だろうか。失望と憤怒に燃える彼奴の顔が見えるようだ。……と話をしてくると、壮平老人は、私の言葉を遮った。

「それはいいが、その九万円の黄金液はどう始末したのかい」

「警視庁へ引き渡したよ」

「どうだかね。九万円じゃないか」いかにも惜しい儲け物だのという顔をした。

「本当に渡したよ。私は金が欲しいわけでの仕事をやったんじゃない。目的は銀座の縄張へ切りこんできたカンカン寅の一味にひと泡ふかせたかっただけさ」

「それじゃ警視庁は大悦びだろう」

「うん。——」

大手柄と判つたときの、折井山城の二刑事の嬉しそうな笑顔が再び目の前に見える。二人は意気揚々と本庁へ引上げていったことだろう。

そのとき、解纜かいらんを知らせる銅鑼どらの音が、船首の方から響いてきた。いよいよお別れだ。私は帽子に手をかけた。

「お父さん。――」

いままで黙つて聞いていた清子が、突然顔をあげた。

「なんだ、清子」

「あたしは船を下りるわよ」

そういうが早いのか、清子はトランクを両手で持ち上げた。

「なにを云うんだ。横浜はまにいちや、生命がない。カンカン寅の一味は張り子の人形じゃないぞ」

「生命が危いくらい、あたし知っているわ。でも……でも、あたし死んでもいいのよ、政ちゃんの傍そばに少しでも永く居られるなら……」

清子は憑つかれたような眸ひとみで、私の方に顔を向けた。

壮平は気が転倒てんとうしてしまつて、一語も発することができないで居る。銅鑼は船内を一巡じゆんして、また元の船首で鳴っていた。出発はもう直ぐだ。

肚はらを決めた私は、イキナリ清子の手からトランクを取った。

「まあ嬉しい。あたし下りてもいいの」

「いや、いけない」

私は手に持ったトランクをソツと下に下ろした。清子は顔を両手の中に埋めた。私はトランクの上に静かに腰を下ろした。そしていつまでも動かなかつた。銅鑼はもう鳴りやんで、清見丸は静かに動き出した。

満洲へ、満洲へ……。銀座に別れて満洲へ……。

それもまた、いいだろう！

折から、埠頭の方から、リリリリと号外売りの鈴の音が聞えてきた。私の眼底にはその号外の上に組まれた初号活字しよごうかつじがアリアリと見えるようだ。——そのとき私は耳許みみもとに、魂をゆするような熱い息づかいが近よってくるのを感じたのだった。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三一書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「キング」

1934（昭和9）年6月号

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

疑問の金塊

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>